

Case 3
愛媛大学

大学の教養科目の早期履修や「課題研究」の高度化などにより、大学での「深い学び」の基盤を育む

愛媛大学は、大学教養科目を受講した高校生に単位を与える制度など、3つの柱で高大接続を推進。高校段階で学びへの意欲を高めることで、大学での深い学びにつなげようとしている。



1949（昭和24年）設立。法文・教育・社会共創・理・医・工・農の7学部と大学院7研究科を擁する、学生数約1万人の国立大学。「学生中心の大学」「地域とともに輝く大学」を目標に、教育改革を推進。

● 取り組みの概要

社会が求める「汎用的能力」を 高校生の時期から培う

愛媛大学は、2008年度に農学部附属農業高校を愛媛大学附属高校に改組したのを機に、課題発見・解決型学習による高大接続に本格的に取り組んできた。その実績を基に、高校段階で学習意欲や確かな学力をさらに高め、大学での「深い学び」につなげることを目指し、AP事業に申請した。弓削俊洋理事・副学長はこう説明する。

「本学は、12年度、学生が卒業時に身につけていることが期待される能力を、『知識や技能を適切に運用する能力』『論理的に思考し判断する能力』など5つに整理しました。社会が求め

る汎用的能力は、大学入学後から始めるのでは遅く、高校時代から培っていくことが、大学教育の到達点を高めるためには効果的だと考えました」

AP事業の採択を受けて、同大学は高大接続推進室を設置。3つの柱で取り組みを進め、幅広い教養や課題発見・解決力、学びへの意欲、知識活用能力などを育成している（図の①～③）。

● 進捗・成果

① 高大の教員が連携して

② 3つの柱で高校生を指導

3つの柱を具体的にみていこう。

① **バイオニア・アドバンスト・ブレイズメント（P・A・P）プログラム（*）の創設と二重（デュアル）単位の付与**

この取り組みは、高校生が大学入学

前から大学で幅広い分野の教養科目を学び、所定の成績を取れば、同大入学後に取得単位として認定することで、ほかの科目に興味・関心を広げたり、より高度な内容を学んだりできるようにするというものだ。

P・A・Pプログラムは、意欲と能力の高い高校生向けに大学の教育内容を先取りしたもので、現在のところ附属高校と、SGH校の愛媛県立松山東高校、SSH校の同松山南高校の近隣3校を対象に、数学と英語で大学教員による授業を行っている。

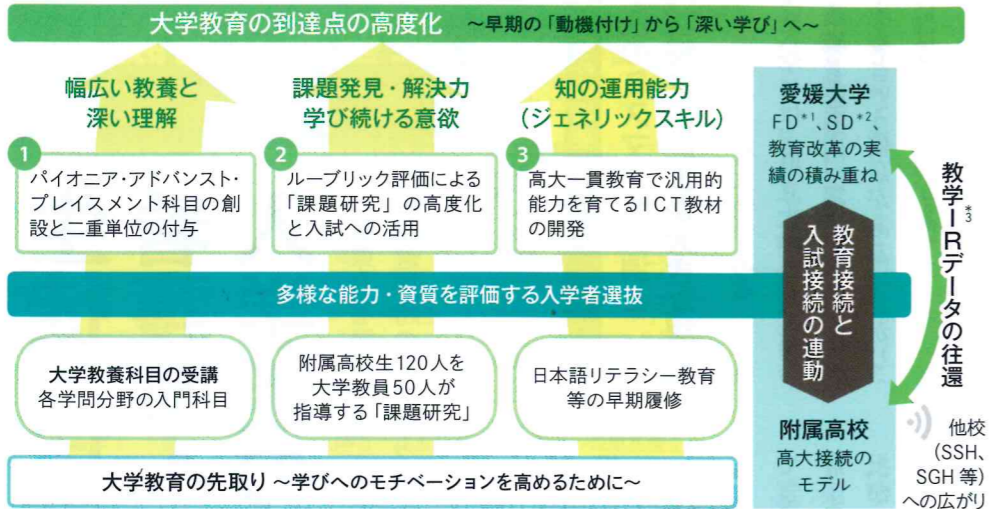
まず数学では、附属高校3年生の理系クラスを対象に、大学教員と高校教員がチーム・ティーチングで「数学Ⅲ」「数学活用」の授業を行う。4～12月の週3回、計180時間かけて学び、

高校の学習範囲に加え、集合やパラドクスなど、大学レベルの発展的な内容も扱う。また、16年度からは集中講義も行い、同大学の単位認定も受けられるようにした。

英語では、共通教育科目「ことばの世界」を3校の高校生も受講できるようにした。「ことばの世界」は、大学のネイティブ教員が行う活動主体の英語の授業で、2グループに分け、10～2月の放課後に実施（各8回）。定員は各回30人で、英検2級程度の英語力を有し、学校長の推薦を受けた2年生以上が対象だ。こちらも数学と同様に、同大学の単位認定が受けられる。

さらに、附属高校生向けには、高校の正規科目「フリーサブジェクト」において、3年生全員が週1コマ、同大

図 高大接続の取り組みの概要



*1 Faculty Development の略。教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称。
*2 Staff Development の略。大学職員として大学運営や学生支援などの能力向上を目指す組織的な取り組みのこと。
*3 Institutional Research の略。高等教育機関内の調査研究を実施する機能または部門。*大学提供資料を基に編集部で作成

同大学は、AP事業の採択前から附属高校で、採択後にはSGH校の松山東高校でも課題研究を支援し、高校生は大学教員からの指導を受けている。15年度には研究内容のさらなる高度化を目指して、大学と高校の教員が協働して、課題研究評価のための愛媛大学版ルーブリックを作成し、評価への活用を始めた。「それまでは高・大の教員の間で評価規準の共有が十分ではありませんでしたが、ルーブリックの作成により、育てたい力が誰の目にも明確になり、教員は指導と評価がしやすくなりました。生徒が自

らを成長させる上でも、重要な指標となっています」（弓削理事・副学長）

今後は、ルーブリックを大学入試での多面的・総合的な評価の「評価ツール」として活用する方策も検討する。

③ **高大一貫教育で汎用的能力を育てるICT教材の開発**

同大学は、共通教育科目「日本語リテラシー入門」で用いているeラーニング教材を基に、高校生向けのeラーニング教材を附属高校の教員と連携して開発した。この教材を活用して、附属高校の2年生が貸与されたタブレットを使って学習を進めている。

「附属高校出身者は、入学後、他校出身者からうらやましがられるほど、表現やコミュニケーションに必要な日本語運用能力が高まっており、課題研究の論文作成やプレゼンテーションなどに生かされています」（壽副学長）

現在、化学などの他分野でも、早期から大学教育に触れられるICT教材を開発中だ。

成果と課題を明らかにしていく。

現在の課題の1つは、高校への公平性の担保だ。人や予算に限りがある中、現在の連携先3校から、より多くの高校に取り組みを広げる方策を議論している。また、AP事業終了後、取り組みを継続する方策も検討課題だ。

さらに、同大学は、「教育コーディネーター研修会」を16年度は4回開催して、AP事業など高大接続の活動結果を報告したり、ワークショップで実際の入試を想定した評価方法を検討したりしている。

「情報共有を進める中で、共通の枠組みで二重単位などが他大学にも広がっていくことを期待しています。次の段階では、高大接続の試みや成果をいかに入試改革につなげていくかについても検討を進めていきたいと思っています」（弓削理事・副学長）



理事・副学長（教育担当）
弓削俊洋 ゆげ・としひろ
愛媛大学法文学部教授などを
経て、現職。高大接続推進室長、
愛媛大学教育・学生支援機構
長を兼任。
副学長
壽卓三 ことぶき・たくぞう
愛媛大学教育学部教授、同学部
長などを経て、現職。高大接続
推進室副室長を兼任。

壽卓三副学長は次のように説明する。「高校生は非常に積極的で、大学生にもよい刺激を与えています。成績も優・良の生徒が60%以上と、大学生と比べても遜色ありません」

② **ルーブリック評価による「課題研究」の高度化と入試への活用**

今後、ルーブリックを大学入試での多面的・総合的な評価の「評価ツール」として活用する方策も検討する。

③ **高大一貫教育で汎用的能力を育てるICT教材の開発**